

豆狸の寝言

副会長 三原幸二

先日の読売新聞の「人生案内」欄に、たいへん興味深い記事が掲載されていました。

「彼女と帰省」 感覚疑う——という見出しで、五十歳代の主婦の相談です。

「息子は県外の大学に進学しアパートで独り暮らし。誰の監視もなく、いまどきの学生生活を満喫しているのであろうことは察しがつきます。『彼女が出来た』との報告も受けました。

その息子が突然『休日に、彼女と一緒に泊りがけで実家に帰りたい』と言ってきました。もちろん私はやんわりと断りました。

いったい、いつから彼女が平気で彼のところに泊まりに来るようになったのでしょうか。もちろん、その相手を選んだ息子の側にこそ問題がある訳で、教育に誤りがあったと猛省しております。

聞けば、どこにでもある話だとのこと。将来、息子と彼女が結婚したとしても同居は真平ごめんです。昭和と平成の異なる価値観。どこら辺で折り合いをつけたらいいものか、ご助言をお願いします」

そんな内容の相談でした。

これに対する作家の先生の回答が至極明快でしたので全文を引用させていただきます。

「男女のつきあいかたにおいて、昔も今もない、というのが私の主義です。守るべきことは守る。いけないことは、いけないことと厳しく教える。現代の若者だろうと何だろうと、そんなこと関係ありません。

あなたが嫌だと思ったなら、息子さんに率直にそう伝えるべきです。世間の風潮や流行なぞは、どうでもよろしい。やんわりと断わるから、



相手に通じないのです。娘さんが承知でも、娘さんのご両親に申し訳ないから、宿泊はいけない、とはっきりと是非を告げるべきです。親の姿勢を示した上で、娘さんに会い、あなたの目でごらんになることです。そうすれば、あなたも安心するでしょう。

親と子の価値観は当然、異なります。しかし、いいこと悪いことのけじめは、これは時代に関係なく、変わりません。親が嫌だと思うことは、子に教える。これは決して大人の押しつけでなく、当然だと思っています。あなたの感覚がまっとうなのであって、時代の方が間違っているのです」

この見事な、年ごろの息子を持つ母親へのアドバイスを読んで、私はなんとさすがもいえず清々しい気持ちになりました。皆さんはいかがでしょう。

(ある人生案内) 2009年執筆

会報誌 **NewWave** へご寄稿のお願い

「New Wave」誌は、皆さまに身近な会報誌としてご愛読していただくことを目指しています。その第一歩として、読者の皆さまからのご寄稿を数多く掲載することを計画しています。一人で心の中にしまっておくには勿体ないような面白い話や為になる話。それに、地元のグルメ情報などジャンルは問いません。

ご寄稿は、メール・アドレス「zennichi@jeda.or.jp」へ、件名「寄稿」と記入の上、送信して下さいようお願い致します。800～1000文字程度にまとめた文章に写真2～3点を添えていただければ幸いです。

各単組の組合員企業ならびに賛助会員企業の皆さまよりのお便りをお待ちしております。

全日本電設資材卸業協同組合連合会・広報委員会